

山頭火ふるさと館報

平成三十年十月
第一号

いあつらひ

山頭火ふるさと館
初代館長 西田 稔



「昭和の芭蕉」と言われた山頭火が松山市で亡くなって七十八年、その山頭火の顕彰記念館が山頭火の生誕地であるこの防府市に「山頭火ふるさと館」として、昨年（平成二十九年）十月に開館いたしました。

山頭火の顕彰記念館建設は、防府市民だけでなく全国の多くの山頭火ファンの長年の願いでございましたので、このたび記念館がこのような立派に完成して、開館できたことは大変大きな喜びでございます。

山頭火ふるさと館は、山頭火の顕彰記念館として、山頭火にまつわる資料を収集、研究し、発信していくことはもちろんですが、「山頭火をうたい、山頭火にしたしみ、山頭火をつたえる」という基本理念のも

と、自由律俳句の一大拠点となって交流施設としての役割も果たして参りたいと思っております。

現在、本館が所蔵する資料は書籍も含めてその総数は約三〇〇〇点で、山頭火直筆の短冊や掛け軸、葉書き、そしてまた尾崎放哉、萩原井泉水、久保白船、河東碧梧桐といった山頭火と関わりのある著名な自由律俳句の俳人直筆の作品も所蔵しています。

全国に散在していた山頭火や自由律俳句に関する貴重な資料も集まりつつありますので、それらを今後計画的に展示していく予定です。開館以来これまでに四回の企画展を開催して、多くの方々に作品を観覧いただき、この七月には入館者が二万人を超えました。

今後もさらに多くの皆様に、山口県が生んだ昭和の偉大な俳人種田山頭火の魅力を、このふるさと防府から全国へ、そしてまた後世にもしっかりと伝えていきたいと思いい、このたび「山頭火ふるさと館報」を創刊いたしました。

本館報は今後毎年二回程度発行して、ふるさと館の現状や今後の企画・イベント情報をお知らせし、より多くの皆様に山頭火や自由律俳句に親しんでいただけたらと思っております。

最後になりますが、どうぞ今後とも温かいご支援ご協力を賜りますようお願いいたします。創刊のご挨拶とさせていただきます。



▲種田山頭火 (旧小林写真館 小林銀汀 撮影)

目次

館長あいさつ	-----	1
開館セレモニー	-----	2
企画展紹介	-----	2. 3
イベント紹介	-----	4
市民ギャラリー 過去の展示	-----	5
今月の一句 アーカイブ	-----	5
収蔵資料紹介	-----	6. 7
防府市内の山頭火顕彰の歴史	-----	8
今後の企画展紹介	-----	8



開館セレモニーの涙雨

お帰りなさい 山頭火

館長 西田 稔

「雨ふるふるさととははだしであるく」「ふるさとの水をのみ水をあび」「ふるさとの学校のからたちの花」山頭火が詠ったふるさとの句です。

山頭火がふるさと防府を去ったのは今から一〇二年前の大正五年。山頭火三十五歳の時でした。ふるさとを想い続けたその山頭火の顕彰記念館が生誕地防府市に完成し、平成二十九年十月に開館いたしました。ずっとふるさとを思い続け、ふるさとに帰りたいかたであらう山頭火が一〇〇年目にして防府に帰ってきたのです。

「山頭火ふるさと館」が完成して、山頭火もきつと喜んでいることでしょう。開館セレモニー当日は一時急に大粒の雨が降り出し、その後は見事な秋晴れとなったのですが、あの雨は山頭火の流した喜びの涙であったのではないかと思っています。

その感動の開館セレモニーでは、山頭火の母校である松崎小学校の児童も参加してテープカットが行われました。

多くの市民に祝福された心に残る素晴らしい開館セレモニーとなりました。

記念館建設にご尽力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。とうございませ



▲テープカットの様子

開館特別企画展

「山頭火の句 名筆特選」
「百年目のふるさと」

会期 平成二十九年十月七日
平成三十年一月八日

行乞流転の俳人、種田山頭火のふるさと
山口県防府市に開館!

山頭火ふるさと館
SANTOKA FURUSATO MUSEUM

10月7日(土)
14:00開館!

開館特別企画展
山頭火の句 名筆特選
～百年目のふるさと～

10月7日(土) - 30日(月・祝)
10月7日(土) - 10月30日(月)

山頭火ふるさと館は、防府生まれの漂泊の俳人、種田山頭火の顕彰施設として、平成二十九年十月七日に開館いたしました。山頭火は一八八二年に防府で生まれ、ふるさとで文学と出会い、やがて才能を開花させていきました。しかし、一家離散などにより、一九一六年に防府を去り熊本に移り住みます。その後は一時の定住と行乞流転の旅を繰り返しながら、句を作り続けました。彼が防府を去ってから約百年の時を経て、山頭火の句をふるさと防府の地に結集。直筆の作品群を、四つの時代に区分して十七点展示しました。

① 防府時代

種田家が大道の酒造場に移り住んだ頃、山頭火は防府を中心とした俳句結社で文学活動を行っていました。自由律俳句雑誌『層雲』に入選し、さらに「山頭火」と俳号を変えた大正二年頃の、俳句活動がうかがえる葉書や句の原稿を二点展示しました。

② 行乞時代

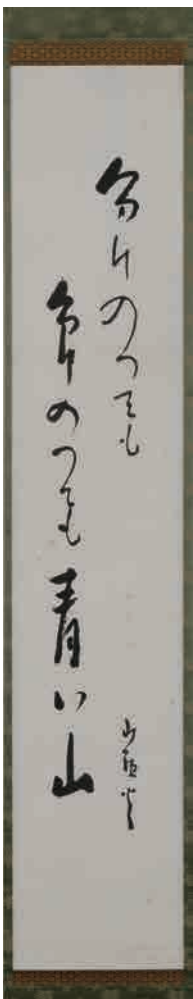
大正十五年、山頭火は行乞流転の旅に出、昭和七年まで九州、四国、山陰地方を歩き続けました。旅の中で詠んだこの時期の句「分け入っても分け入っても青い山」「捨てきれない荷物の重さまへうしろ」など、現在よく知られている句を五点展示しました。

③ 其中庵時代

昭和七年、山頭火は、山口県小郡町(現・山口市)に「其中庵」を結庵しました。自身の庵を得た山頭火は、庭で野菜を育てつつ句集や俳誌を刊行するなど、自活を試みています。この頃の、「うれしいこともかなしいことも草しげる」など、穏やかな庵住生活を詠んだ句など四点を展示しました。

④ 一草庵時代

昭和十四年十月に四国へ渡海し、愛媛県松山市に「一草庵」を結庵しました。余生を過ごしたこの時期の穏やかな句「おたまたも或る日は来てくれる山の秋ふかく」など五点を展示。昭和十五年十月十一日、一草庵にて五十九年の生涯を終えた山頭火の辞世の句「もりもり盛り上がる雲へあゆむ」も展示しました。



▲「分け入っても

分け入っても

青い山」

会期 平成三十年一月十四日～三月五日

企画展
「山頭火ふるさと館コレクション展示」
～山頭火の「旅空」～



全国各地を行乞してまわる中で多くの句を作った山頭火の作品には、「空」に関するものが多く見受けられます。この企画展では、山頭火が雨に濡れても炎天にさらされても歩き続け、あるいは雲や風によって行乞への思いを募らせていたことがうかがえる作品を集めました。「これから旅も春風のゆけるところまで」、「ぬかるみ雪はふれど」、「まつたく雲がない笠をぬぎ」、「春風の鉢の子一つ」など山頭火の句は八点展示しました。

また、全国行脚を試みその途上で句作を行った、山頭火にとって先人とも言える河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）、萩原井泉水（おぎわらせいせんすい）の作品もご紹介しました。碧梧桐の「雲高く一片かける清水哉」は旅の中の句、井泉水の「空を歩むろろうと月ひとり」は旅をする自分の姿を詠んだものです。

会期 平成三十年三月十日～五月六日

企画展
「山頭火とふるさと防府」



防府で生まれ育った種田山頭火は、防府を去ったのちも俳句や日記などでふるさとのことをしばしば述べています。この企画展では、山頭火の作品を通じてふるさとに対する思いを紹介していきます。

防府から離れていた行乞の時代からは、「ふるさととは遠くして木の芽」などの直筆の短冊三点を展示。また、大道に住んで俳句活動を行っていた時代の、貴重な一点ものの雑誌『五句集 夜長』や句会資料なども計四点展示しました。さらに、防府を近くに感じることの多かった其中庵時代からは、ふるさとに対する複雑な思いが感じられる

「雨ふるふるさとははだしであるく」など山頭火の直筆作品四点を展示しました。

会期 平成三十年五月十一日～七月一日

企画展
「山頭火と定型俳句」



山頭火の句で現在人口に膾炙しているものは、主に大正十五年以降に作られたものですが、山頭火の創作活動は防府にいた時代から始まっています。

この企画展では、山頭火の初期の創作活動を探り、のちの自由律俳句に至るまでの山頭火句の変遷の一端を紹介しました。「田螺公（でんらこう）」と名乗っていたころの古語の使用や表現の工夫が多い定型俳句を紹介しました。さらに、大正二年に「山頭火」と俳号を改める宣言を記した雑誌も展示。また、雑誌『層雲』から、大正四年から六年にかけての三冊を展示し、定型俳句から徐々に自由律に変遷していく様子を紹介しました。

山頭火力カルタで書き初め大会

平成三十年一月六日、七日の二日間にわたり、防府市内の小学生が集まり、「山頭火力カルタで書き初め大会」を開催しました。カルタ取りでは読み札を子どもたちが順番に読んでいき、カルタで遊びながら山頭火の句を声に出して味わってもらいました。その後、カルタで取った札の中から好きな句を一つ選び、短冊に書き初めました。筆で書くのは難しかったようですが、自分が選んだ句を自分らしい文字で書いていました。書き初めの作品は山頭火ふるさと館内の市民ギャラリーのコーナーに展示し、お客様からも人気でした。



山頭火・自由律句講座

平成三十年度から、山頭火と自由律句を学ぶ講座を開催しています。

山頭火を学ぶ会

五月十六日より毎月第三水曜日
三十年代前期は、山頭火ふるさと会会長の窪田耕二先生、護国寺住職の橋本隆道先生、そして山頭火ふるさと館学芸員の三名を講師として、五回シリーズの講座を開催しました。「人生」「友人」「俳句」「旅」「ふるさと」という五つのテーマで、山頭火について学んでいただきました。

自由律句を学ぶ会

六月十三日より毎月第二水曜日
三十年代前期は十月までで計五回開催されます。富永鳩山先生を講師に迎え、実際に自由律句を作る前段階としてさまざまな視点からお話ししていただいています。

自由律句で遊ぼう

六月三十日より毎月第四土曜日
小・中学生を対象とし、三十年代前期は十月までで計五回開催されます。門田美和子先生を講師として、実際に自由律句を作ったりカルタを使って山頭火の俳句を勉強したり、楽しく自由律句に触れることのできる講座です。

ふるさと展示交流室使用イベント

山頭火ふるさと館の「ふるさと展示交流室」は、普段は無料スペースとして開放していますが、イベントや会議、講演会などで専用使用もできます。過去に交流室を使用して開催されたイベントのうち、一部をご紹介します。

菅公みらい塾

十月十四日(土)、防府市の小中学生向けプロジェクト『菅公みらい塾』による講座が当館で行われました。小中学生約二十人が参加し、護国寺住職の橋本隆道氏の講義を聴き山頭火について真剣に学んでいました。

第十七回防府音楽祭街角コンサート

一月五日(金)、(公財)防府市文化振興財団が毎年開催している防府音楽祭街角コンサートがふるさと館にて開催されました。田中雅弘さん等三人のチェロ奏者による演奏が行われ、多くの方が優しい音色に耳を傾けていました。

シンポジウム

「デザインでつなぐ俳句と美術工芸と近未来の喫茶文化」
一月二十七日(土)、山口県立大学と防府市との共同研究として開催されました。萩美術館・浦上記念館副館長の講演、県立大学の方々のプレゼンテーション、当館館長を含む五人のパネラーによるパネルディスカッションなど、充実したシンポジウムになりました。



▲街角コンサート

市民ギャラリー 過去の展示

山頭火ふるさと館には、「市民ギャラリー」と呼ばれるスペースがあります。ここは一般の皆様さまざまな文化活動の成果を展示していただけるスペースです。

山頭火顕彰の歴史

山頭火ふるさと会による山頭火顕彰活動の歴史を展示していただきました。防府で開催された「山頭火フォーラム」の紹介や、俳句の会や句碑除幕式なども紹介されていました。

和紙人形

山口市在住の長沼隆代さんによる、和紙人形の展示をしています。山頭火の句からイメージした情景を、和紙を使って生き生きと表現された作品は、来館者にとっても人気です。



▲和紙人形の展示

今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

平成二十九年

十月 酔うてこほろぎと寝てみたよ

昭和五年十月九日 「こほろぎ」を詠んだ句は他にもいくつもあり、まるで一緒に暮らしているかのようです。山頭火にとつてのこほろぎは、身近にいる、生活をともにできるような存在だったのではないのでしょうか。

十一月 ふる郷の言葉なつかしう

話しつゞける

昭和五年十一月三日 同じ宿で山口出身のお遍路さんと、ふるさとの言葉で語り合ったときに感じた懐かしさを詠んでいます。山頭火にとつてふるさとを思い出すきっかけになるもの一つに「ふるさとの言葉」があったようです。

十二月 自嘲

うしろすがたのしぐれてゆくか

昭和六年十二月三十一日 自分の後ろ姿を見ることはできません。他人に見られている自分の後ろ姿を俯瞰で捉え、自らを嘲る、という句です。行乞の旅に生きるほかない自分自身を客観的にみて、「自嘲」しているのでしょうか。

平成三十年

一月 父によう似た声が出てくる

旅はかなしい

昭和七年一月二十八日 この頃すでに亡くなっていた父・竹治郎と

は生前、反目する面があったらしく、自身の声が父に似てきたのか、旅先で似た声を聞いたのか、単なる感傷では言い表せないかなしさがあったことでしょうか。

二月 春がきた水音のそれからそれへあるく

昭和九年二月十九日

この日は福岡方面へ一週間ほどの旅に出發した日でした。流れ行く水の水音を聞きながら、これからの旅に思いをはせている様子が浮かびます。また、無常をあらわす水に共感するものがあつたのかもしれない。

三月 後になり先になり梅にほふ

昭和十一年三月彼岸頃

奈良の月ヶ瀬梅溪辺りで詠んだ一句。梅を見ようと立ち止まると、歩く人々が後になつたり先になつたりする様子でしょうか。それとも、ちらほらと咲く梅が後ろに先に咲いている状況でしょうか。想像が膨らむ表現です。

四月 さくらさくらさくらさくらちるさくら

昭和七年四月十五日

一見どこで区切るのか迷いますが、「桜、桜、咲く桜、散る桜」と読み解けた瞬間、満開の桜が散ってゆく姿を想像させてくれます。ひらがな表記による文字の形の面白さがあり、リズムよく詠まれています。

五月 ひとりひつそり雑草の中

昭和九年五月二十日

山頭火は水と同様、雑草も愛し、よく句に詠んでいました。其中庵に暮らしていたこの頃、世間から少し外れて一人静かな幸福を感じながら暮らす自分と、華麗な花々の脇で力強く茂る雑草を重ね合わせて見ていたのでしょうか。

〔二一・ウ〕

追放す邪宗徒もありて夜長船 田螺公

燧地○

破天楼○

連月○

塩仏 夫程に気乗りがせぬ

破 邪宗徒とのある□めに乗合客の夜長をより長く思ふたの

でしよう、上五は大業なれど通じて面白し

(月) 生嘗テ船ニ天草長崎方面ニ放浪シ今北向ニ

接シ再誦三読転々迷深シ

(紫) 惚て文芸を賞翫するには各賞翫者の知識、経験の深淺、人格の高下等に依て各々感じ

を異にするはいふ迄もない事で、殊に己が通過せし□□、己が経験せし事件等

に□するものが一度文芸

に表現せられたのを見ると、いとく感を深うするものである。

しかし此処に其感を深うするは、あながち作品の勝れて居るの致す処では

ないといふ事を思はねばならぬ。

〔二六・ウ〕

孤独讚ず偏狭を夜長星晴^{れて}

田螺公

破天楼○

塩仏○

塩仏 偏狭を愛す、孤独讚す少々不熟か

山、不熟は偏狭の美、すぎな句也、

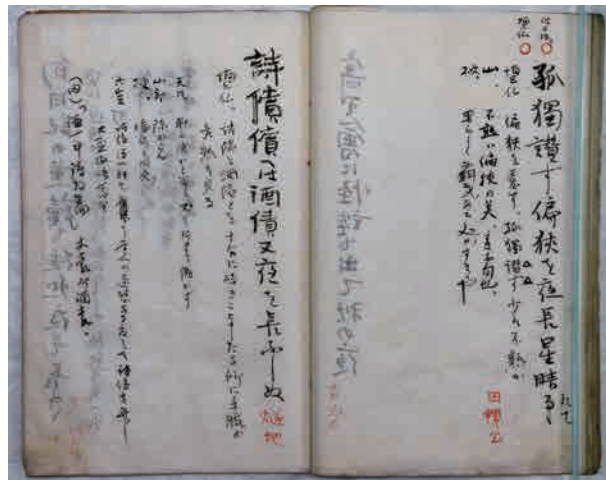
破、男らしく覇気ある処がすぎや

〔三九・ウ〕

湖畔きて森野宿夜長啼く鳥か 田螺公

塩、平淡にして難なし

山、あまりに平淡、趣味ウシシ



▲右ページは「26・ウ」のページ。左ページは別の人の句が掲載されている。



▲椋鳥會五句集十一月号『夜長』

【解説】

当資料の形態は、縦二四ミリ×横一七ミリの半紙本で、装丁は袋綴じ、四十五丁である。

回覧順序には、十五人の名前が見える。「宿所」の欄から、香川県からの参加者がいることが分かり、ここに椋鳥会の活動の広がりを見ることができる。また、山頭火と生涯交流があった久保白船も、「破口栓」として名を連ねている。山頭火と白船の出会い、椋鳥会を通じてであった可能性が考えられる。

ところで、五句集は、各人の句に参加者による評が書かれていることが特徴的である。幹事による「注意」によれば、一回目の回覧の時に批評や点を入れ、二回目に、批評が付き採点された状態で回覧する仕組みだったようだ。

山頭火の句は四句掲載されている。当時は、「田螺公」(でんらこう)という俳号を用いていた。四句のうち、「酒に茶を」の句は批判が多い。このページは一部が切り取られているが、それに沿って書かれた評もあるため、当時回覧中に切り取られたと考えられる。一方高評価だったのは「追放す」の句で、三点入っており、回覧の際も活発に議論がなされていた様子が見える。

山頭火を含め椋鳥会の参加者たちは、このような仕組みの回覧雑誌を通じて俳句の研鑽を積んでいたことが分かる。

椋鳥会の資料は、このように、初期の山頭火の句を知ることができる資料である。また、末尾には会員たちが短い文章を寄せた「俳楽屋」と題したページもあり、明治末から大正初期にかけて山頭火が残した記録として貴重である。

次回以降、今回翻刻した四句について詳しく解説し、また、「俳楽屋」に掲載された山頭火の文章を紹介する。

凡例

一、旧字体は新字体に改めた。ただし、固有名詞及び俳句の表記は原文に従った。

二、改行はできる限り原文どおりとした。

三、適宜、濁点及び句読点を補った。

四、ページ数は、一丁の表を「一・オ」、二丁の裏を「二・ウ」と記した。

防府市内の山頭火顕彰の歴史

山頭火ふるさと会 窪田耕二

防府市での山頭火顕彰活動は、市内の定型俳句仲間たちによってスタートしています。グループのリーダーだった医師柳星甫は、山口県俳壇の重鎮、そして郷土史家でもあり山頭火に注目、生家に近い八王子一丁目の戎が森児童公園に句碑建立を呼びかけ、昭和二十九年十月、「雨ふる故里ははだしであるく」の句碑を建立しました。

その時に集まった寄付金を活用、昭和三十一年に、本橋の市営墓地へ俳人種田山頭火墓が建立されました。

自由律俳句の会も結成され、又田竹栖らによって俳句会も行われていました。

昭和四十五年頃から、山頭火が全国的に注目され、昭和四十七年十月十一日の三十三回忌に防府の文化を高める会により生誕地跡石碑が建てられました。

昭和五十五年五月に山頭火研究会が設立され、同年に第一回山頭火自由律俳句大会が始まり、平成二十九年十二月、第三十八回まで継続されています。

昭和六十年一月に防府駅前に等身大の銅像と句碑、平成元年九月、生誕地に句碑が建立されました。

平成四年十月に防府市デザインプラザで第一回全国山頭火フォーラムが開催され、平成二十九年十二月まで山頭火ゆかりの場所です。十五回まで継続されています。

全国フォーラム開催を機会に山頭火記念館設立への機運が高まり、山頭火研究会から山頭火ふるさと会と名称変更。平成二十九年十月七日、山頭火ふるさと館がオープンしました。

今後の企画展情報

「常識を打ち砕け！自由への誘い(いづな)」

自由律という名のルール

会期 十月十三日(土)～十二月二日(日)
近代の定型俳句からの自由を求めて「自由律俳句」が確立されていった時代の作品を展示します。定型俳句の制約を破った時代とさらなる自由を求めた時代に分け、それぞれの時代で山頭火や同時代の俳人が作った新しい形の俳句や俳句論などを紹介します。



「淡きこと水の如し 山頭火の愛した水」

会期 十二月七日(金)

平成三十一年二月三日(日)

全国を旅する中で各地の名水を味わったともいわれている山頭火は、水に特別な思いを抱いていました。水のような生き方を願った山頭火の思いを解き明かします。

「うしろすがたが見つめた先に」

会期 平成三十一年二月八日(金)

四月七日(日)

ふるさとを離れ、家族と離れ、一人行きの旅に出た山頭火は、何処をめざして歩き続けたのでしょうか。黙々と歩きながら彼が見つめた先を探ります。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前10時～午後六時

(展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料(無料コーナーもございます)

大人三〇〇円(二〇〇円)

小・中・高校生一五〇円(一〇〇円)

※未就学児は無料

※()内は二十名以上の団体料金

※障害者手帳などをお持ちの方は、手帳の提示により無料(介護者一名までを含む)

アクセス

防府駅でんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第1号

平成30年10月1日発行

編集・発行

(公財)防府市文化振興財団

山頭火ふるさと館

〒747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113